

自然災害伝承碑の活用 ー男鹿半島・大湊ジオパークの例ー

高尾実可子 渡部公成 竹内弘和（男鹿半島・大湊ジオパーク推進協議会事務局）

はじめに

～これまでの自然災害伝承碑と男鹿半島・大湊ジオパーク～

男鹿半島・大湊ジオパークには文化7年の地震、昭和14年男鹿地震、昭和58年日本海中部地震に関する地震・津波被害を伝承する石碑があり、ジオツアーや防災教育等に活用してきた。

国土地理院への登録とガイドの会ワーキンググループの活動

2019年男鹿市内の6基の石碑が国土地理院の自然災害伝承碑に登録。石碑の情報をガイド全員が共有できる資料を作成するワーキンググループを結成。石碑を調査する中で過去の災害の被害の様子が詳しくわかったほか、現地を案内する際の具体性や説得力の根拠となる数字データ、過去の災害とジオサイトの関わりなどが分かってきた。

ガイド活動と拠点施設での防災学習

認定ガイドによる現地案内以外にも、自然災害伝承碑を活用した防災学習を拠点施設である男鹿市ジオパーク学習センターで行っている。現状では、小中学校の校外学習や教育旅行での依頼が、今後は子どもだけでなく大人にも防災・減災を広げる工夫が必要である。



男鹿半島・大湊ジオパークの自然災害伝承碑



ガイドの会ワーキンググループ
現地調査(上)と勉強会(下)

》》》》ガイドの会資料作成ワーキンググループの活動《《《《

目的

ガイド全員が自然災害伝承碑の情報を共有できる資料を作成。ガイドが事前に現地を下見する際や個人の勉強に役立つ資料をつくる。

調査項目

石碑の情報（建立した年、災害発生日時、碑文の内容）、石碑の状態・保存状況、拠点施設からのアクセス、危険箇所の有無など。

メンバー構成

昭和58年日本海中部地震を経験した人から地震後に生まれた人までさまざまな年代（25歳～75歳）の男女6名のガイドと事務局員の計7名。リーダーは日本海中部地震後に生まれた事務局員（兼ガイド）が務めた。



自然災害伝承碑ガイド資料

石碑1基につきガイド1人が情報収集と執筆を担当し、カルテ形式でまとめた。

》》》》ワーキンググループで得られた成果《《《《

1. 「ガイドする際の具体性や説得力が増す数字データ」

津波の高さ、津波が到達するまでの時間など

例：日本海中部地震津波慰霊之碑（男鹿市五里合）

石碑の側面に当時の津波の高さ（海拔6.89m）が刻まれている。海から石碑までの距離はおよそ90m。正面の碑文には「地震の約20分後全く予期せざる大津波が襲来し」とある。

2. 「数字から見えてくる地震発生時のストーリー」

集落の人々によって助け出された児童数からわかる地震発生直後の加茂青砂集落

遠足で加茂青砂海岸を訪れていた合川南小学校の児童13名が津波に巻き込まれ亡くなったが、加茂青砂集落の住人によって助け出された児童数についてはあまり知られていなかった。被災した児童45名のうち19名が船で救助、自力で這い上がったものが2名、住人が堤防から手を伸ばして救助したものが4名、ロープ等で救助が6名、方法不明が1名であった。

3. 過去の災害とジオサイトの関わり

過去の地震で損壊の被害を受けたジオサイトや、海岸にある岩にしがみついて津波から助かった人がいたことがわかった。これらの事実は、観光目的のジオツアーでも、防災・減災や災害伝承へ話題を広げることができ、観光客や一般市民など広く防災意識の向上を啓発できると期待される。



昭和14年男鹿地震で岩の先が落下した竜ヶ島
大正時代（左）と現在（右）



昭和58年日本海中部地震の津波から
命を救った岩（男鹿水族館GAO付近）

》》》》現地での自然災害伝承碑のガイド《《《《



修学旅行先が変更になった
宮城県仙台市の高校生

2019年に男鹿市の自然災害伝承碑が国土地理院に登録。ガイド依頼が増えるかと期待されたが、その後新型コロナウイルスが流行。昨年度、今年度ともに自然災害伝承碑のガイド依頼は修学旅行先が変更になった秋田県内および東北地方の学校が主で、ほかには公民館の生涯学習目的でのガイド依頼があった。

加茂青砂海岸を訪れた小学校の先生の感想（秋田県県南地方）

「加茂青砂海岸に行くことで、あなたたちが将来お父さんお母さんになったときに自分の家庭を守る大人になってほしい」
「（ガイドの案内を聞いて）私の思っていたことを伝えてくれた」

小学生の感想

「漁師さんが自分が津波に流されてしまうかもしれないのに関わらず子どもを必死で助けたことを聞いてすごいなと思った」
「自分の命は自分で守る大切さがわかりました」

》》》》拠点施設での防災学習《《《《

男鹿市ジオパーク学習センター常設展示「男鹿と地震の記録」



男鹿市ジオパーク学習センターには男鹿の地震の歴史と防災について学べる常設展示ブースがあり、自然災害伝承碑のパネル展示のほか、図書コーナーには地震に関する書籍もあり、誰でも閲覧可能である。

ジオパーク域内外の小中学校の校外学習



防災学習目的で校外学習にやってくる学校に対して、自然災害伝承碑と男鹿市の災害の歴史について解説しているほか、地震発生の仕組みや液化化、火山噴火の実験など理科の学習内容と防災・減災を関連づけて解説している。

これからの課題

- ・男鹿半島・大湊ジオパークにある自然災害伝承碑はすべて地震・津波に関連する石碑。気候変動などでこれから経験したことのなかった災害（水害、土砂災害など）が発生するかもしれない。
- ・自然災害伝承碑のガイド依頼は主に小中学校の教育旅行と校外学習、防災意識の強いごく一部の大人たちが中心であり、子どもだけでなく広く一般の防災意識の強くない大人たちにも広げていく工夫が必要。
- ・ガイドの会の平均年齢は60歳。日本海中部地震の経験したガイドが多く、ガイドに活動に活かせる体験談があるはず。ガイドの会の高齢化が課題となっている地域も多いが、過去の災害について自分の体験を話すことのできるガイドがいることは強みになる。